

近所の農家さん



野口 のぐち 雅範 まさのり さん (40)

(日の出地区)

野口さんは農業を営む父親が体調を崩したのをきっかけに、それまで勤めていた建築設計事務所を退職し、2015年(平成27)6月、29歳の時に親元就農した。1年間は父親の元で農業を教わり、その後、東京都主催のフレッシュ&Uターンセミナーや経営力強化セミナーで農業技術や経営のノウハウを学んだ。

栽培の主力はトマトで、ビニールハウス5棟合計23アールで年間



トマトハウスで

16トン収穫する。トマトはハウス1棟ごとに定植時期を4月、7月、11月と変えて順番に栽培するほか、1株で11段の長期採りをする事で周年栽培のサイクルを作っている。露地では1.5ヘクタールの畑でキャベツ、ハクサイ、ブロッコリー、ゴボウ、サトイモ、トウモロコシを栽培する他、自宅前の水田で稲作、自宅裏には山林が2ヘクタールあり、山菜やタケノコも収穫するなど多種多様な品目を手掛けている。

販売はJAの日の出町ふれあい農産物直売所、都心部の農地空白地域の学校給食、産地直送通販サイト「JAタウン」へ出荷している。

こだわりのトマトの味で、よりおいしいトマトを作るために栽培前には必ず土壌診断を行い、土の状態に合わせて有機質肥料や微量要素を含む約8種類の肥料を組み合わせて土づくりを行っている。土耕栽培ならではの甘みと酸味のバランスが良く、硬く引き締まったトマトを目指している。「トマトの根の張りが良くなら、味にも自信が持てるよう

になった。直売所で販売していると味の良し悪しで客の付きが違うのが良くわかる。おいしいと感じてもらい、また買ってもらえるように試行錯誤している」と話す。

父親からトマト栽培を引き継ぎ、一番大きく変えたのは病害虫の防除だ。それまでは経験に任せた薬剤選びや散布が多かったが、効果的な薬剤の使用時期や散布量、対象となる病害虫の種類などデータ化し、防除体系を作った。これにより、防除の効率・効果が上がり病害虫による損害を最小限に抑え、収量を安定させることができるようになった。さらに、トマトの天敵であるコナジラミを抑えるため、食用の植物油を主成分とした気門封鎖剤を使用するなど、環境に配慮した農業も積極的に取り入れている。

苦労することは、気象が毎年違うこと。特に最近では春先からの高温や猛暑など、気象の変化が読めず、昨年のデータが使えないため暑熱対策が欠かせなくなった。育苗中のビニールハウスの室温が40度以上になり、苗が枯れて予定

していた定植数が3分の1になったこともあった。異常気象の中で収量を落とさず、いかに営農していくかが課題だと話す。

今後の目標は、直売所において生産者の高齢化による出荷量の減少を食い止めること。そのために、若手の新規就農者呼び込み、サポートができればうれしいと話す。直売所の先輩農家の力を借り、研修先や借りられそうな畑の情報提供したり、居住する場所の相談にのったりと、すでに活動を始めている。



JAタウンでのみ販売する箱詰めトマト

野口さんのトマトを
通販で購入できる
JAタウンはこちらの
QRコードから

